

ボランティア中心授業におけるボランティアの役割 —二大学における実践に基づいて—

筒井 洋一*1

Email: ytsutsui@gmail.com

*1: 京都工芸繊維大学工芸科学部

◎Key Words 授業ボランティア, 越境, 学習空間, 学びの変容

0. はじめに

一般に、大学での学びの空間は、教師と学生だけに限定された学習空間である。これに対し、筒井は、2013年から6年間、閉鎖的な学習空間にとどまるのではなく、むしろどのように越境できるかについて試行錯誤してきた。ここでは、学習空間の閉鎖性を打破する意味で「越境」という用語を使用するが、学外からの授業ボランティアと授業見学者という第三者と、教師・学生という当事者、とが越境的な学びを創り出してきた(1)。過去6年間、授業ボランティア35名以上、授業見学者はのべ1,500名以上が授業に加わり、第三者と当事者との学びを生み出してきた。

いずれの大学でも、教師、学生、見学者、授業ボランティアという構成は変わらないが、ボランティア中心授業であることから、授業ボランティアによって大きく異なってくる。

毎回の授業内容はボランティアが進行するため、実質的には、授業はボランティア中心となった。しかし、二大学のシラバスは似通っているにもかかわらず、担当するボランティアによって、大きく方向性が異なっていた。

このように越境的な学習環境を目指すという共通点はあるながらも、二大学のボランティアの違いによってどのような特徴をもたらすのかについて論じる。

1. 二大学の特徴

1.1 大谷大学「大学の学びを知る」(1年生向け授業)

大谷大学「大学の学びを知る」は、一年生が「現代社会に必要な、自分の事を知る、仲間と一緒に取り組む、チームの力で課題を設定する、改善策を提示する能力を育成する」選択必修科目である。グループワークを前提とすると明記しているが、他の授業ではあまり実施されていないこともあり、当初は受講生30名程度のほとんどはグループワークへの戸惑いがかなり強かった。

越境する学習空間を作るためには、教師、学生以外に授業ボランティアが参加する必要がある。しかし、開講時間が平日午前であったので、従来はなかなかボランティアが集まりにくかった。しかしながら、今回、授業ボランティアに応募してきた女性3名(いずれも幼児や生徒の親)にとっては、この時間帯は逆に活動しやすとのことであった。

個別に応募してきた3名の授業ボランティアはそれぞれ育児休業中の小学校教師、元小学校教師と不登校小学生を抱える母親であった。今回のボランティアに応募し

た彼らは、自身の子供と同時に、小学生や子供と大学生とのつながりをつなげようとした。

ボランティアが子持ち女性であったり、不登校生徒を抱える母親であることによって、これまで授業見学に来なかった、子持ち女性が多数やってきた。特に不登校少学二年生の存在は大きかった。母親に連れられてきたこの生徒は、当初、母親に対して不平を言っていたが、母親が教室からいなくなると、自ら学生グループの中に入ってグループワークに加わっていった。生徒を迎えた学生グループでは、生徒も一緒に入れた話し合いを可能にしてくれ、むしろ学生も相互に需要力が高まり、密な話し合いが可能になった。

こうした不登校生徒以外にも毎回多くの見学者が訪れ、毎時間毎に、2~5名程度がやってきた結果、のべ40名以上の見学者が訪れた。

このように、教師と学生以外にも、常時授業ボランティアと見学者がいる中で、学生は授業に参加し、学生チームにも彼らに関わることで、教室と社会との相互関係の中で学ぶことになった。

2.2 京都工芸繊維大学「リーダーシップ基礎2」(1年生向け授業)

京都工芸繊維大学「リーダーシップ基礎2」の学習目標は、一年生が分野を超えた学生と一緒にチームで、学生にとって望ましい授業を作ることである。40名程度の受講生の多くは一年生であるが、極めて意欲的な学生が多く、授業後に、ボランティア、見学者、学生有志と開催する授業振り返り会にも多くの学生が参加するように、他分野の学生や見学者との出会いに大きな意義を感じていた。

開講時間が夕方なので、例年、この時間帯の授業へのボランティア応募がしやすいようだ。年によって異なるが、2~4名が集まる。今回は2名が応募してくれた。一名は民間の教育団体代表であり、もう一名はIT企業新規事業部の社員であった。企業社員は、出張のために欠席することもあり、Zoomによるオンライン参加を余儀なくされたことがあった。また、オーストラリアや東京などからのオンラインゲストをZoomで授業をおこなった。

Zoom中継によるゲストの参加やオンライン見学者の参加は三年前から実施していたので、コロナウイルス後に、大学の授業が対面からオンライン授業へと転換を余儀なくされたとしてもまったく困ることなく、スムーズにオンライン授業に転換できた。

本年前期「リーダーシップ基礎1」は、受講生100名以上、オンライン見学者30名程度、専任教員およびSAなど10名併せて140名以上のオンライン授業をしている

が、ここでは授業ボランティアではなく、SA (Student Assistant) 中心のオンライン授業を最後までおこなった。

2. 授業ボランティアと学生、見学者との関係

2.1 大谷大学

女性三名で構成された授業ボランティアのゴールは、ボランティアや見学者が関わることで、学生の対話のハードルをどこまで下げることができるのかであった。

初回の授業では、知り合い同士の学生が近くに座り、一人で受講する学生は孤立している状況で着席位置が分散していた。

また、受講生は、教師が登壇するのではなく、ボランティアが登壇して、授業を進行することに驚いていた。しかし、教師だと距離感を感じるが、子持ち女性のボランティアだと距離感がかなり近かった。

授業後には、毎回、学生からの振り返りを Google Form に記入してもらっている。

そこでもっともよく出るコメントは、「自分は人見知りである」「初対面の人と話すのが苦手」である。対人コミュニケーションに苦手感を持つ学生が大半だ。しかし、初回から学生がグループで話し合う中で、最も多いのが「初めての人だったけど、意外に話せて楽しかった」である。病的に対人コミュニケーションに課題がある学生がいなかったことで、授業中でも振り返りシートの記載からでも、最初は苦手だと思っただけで、実際に話してみたら楽しかったと思う学生がた異変であった。つまり、彼らには、対話の場を増やしていくことで、対人コミュニケーションを向上することができるのである。こうした感想は、15週中の最初に限らず、最後まで同様の傾向がある。

しかし、それ以後は、第5週までとは明らかに異なってきたのは、対人コミュニケーションの話よりも、取り組む課題やチーム内でのやりとりについてである。同一メンバーになると、課題やチームでの取り組みについて深く追求する傾向がある。チームで取り組む課題が決まっても、それを深めることの難しさやメンバーの意見の出し合いからまとめていくことの困難さを指摘する意見が多くなる。

第10週以後には、「固定チームで課題に取り組むので、そこで取り組んでみたら、意外に創造的なアイデアが生まれて困難を乗り越えられた」とか、行き詰まった時に、見学者に相談する中で、「学生が前提としていた枠組みに気づいたり」、「アイデアを行動に向けられた」ことも生まれてきた。

このように、最初は、対人コミュニケーションの向上のためには、初対面の人との対話を重ねることが重要なことが明確になってきた。その後それを元にして、チームで取り組む課題を向上することやその際、見学者などのチーム外の人との話の中からきっかけをつかむことで、最終的な発表課題の提出に至っていたことがわかる。

最終発表は、隣のクラスと共同でポスター発表を企画したが、両クラスの学生や見学者が自由に発表に対して説明を聞いたり、質問をしたりすることが全員できていたことが大きな成果であった。ボランティア三名が学生に対話の場を繰り返し作り、さらに、チームで取り組んだ課題についてチーム内で深めるために、チーム内外の人との協力によって、完成に向けたのである。

このように授業ボランティアが授業に関わることで、学生の対話のハードルはかなり下がっていき、他との共働がやりやすくなってきた。また、不登校小学生を含めた見学者が学生チームに関わることで、学生と第三者とのハードルがかなり下がっていった。学生チームは、チーム発表に向けてチーム内での共働をおこないながら、必要な時にはボランティアや見学者の力を借りるという経験をするのが可能であった。

2.2 京都工芸繊維大学

大谷大学の授業カリキュラムの運動性は必ずしも実現していないために、単独の授業で達成できたことが他の授業でどのように広げられるかについて未解決であった。しかし、その一方で、京都工芸繊維大学の授業では、リーダーシップ関連四科目については、明らかに四科目間で同一履修生が履修することが多い。六年前に新設された同科目が、大学の基本方針である、専門分野を超えた横断的な課題に対して、プロジェクトマネジャーの育成を意図して作られていること(テックリーダー)が学生の中に浸透している。そのため、同科目履修学生は、当初からリーダーシップ教育への関心が高い。

ボランティアと教師の関係は、大谷大学と同じく可能な限りフラットな関係である。教員が事前に授業シラバスを設計しているが、大枠だけの記載にあえてとどめておき、ボランティアは毎回の授業設計・進行を担った。時に、教師とボランティアとの間で意見の相違が露呈することもあるが、概ね、ボランティアの意見が尊重される。

学生は、教師よりも、毎回の授業進行をしているボランティアに強い関心を持ち、授業提供者側へのコメントをする場合には、ほとんどボランティアに対してである。学生にとっては授業のプラットフォームを創るのが教師であり、実際の授業を担うのはボランティアであると受け取られている。

毎回多くの見学者が訪れ、毎時間毎に、2~5名程度、最終日には20名の見学者がやってきた。その結果、のべ60名以上の見学者が訪れた。また、見学者も大谷大学に比べて、社会人や男性が多かったが、中学生や高校生、小学校教員などもいて、大学生の上下世代が多かった。

15週のシラバスは以下のように設計されている。

対話の姿勢 Why/What	対話スキル How	授業創り So What
1. ここにいる理由	6. 伝える	11. 授業創り①
2. お互いの違いから学ぶ	7. 聴く	12. 授業創り②
3. 見えることと見えないこと	8. ぶつかると	13. 授業の発表会①
4. 自分たちを見つめ直す	9. まとめる	14. 授業の発表会②
5. 姿勢のふりかえり	10. スキルのふりかえり	15. これからの学びに向けて

表 (1) 大学教育研究フォーラム発表スライド 5 頁

第5週までは「対話の姿勢」について、その場で形成されたグループ間で様々なワークを繰り返していくことになる。第10週までは「対話スキル」の向上を図るために具体的なスキルを使って能力の向上を図っていった。第15週までは「授業創り」として、学生自身が受けた授業をチームで創ることをした(2)。

こうした進行の合間に、Zoom で中国、東京、オースト

参考文献

- (1) 筒井洋一他編著(2015)『CT(授業協力者)と共に創る劇場型授業—新たな協働空間は学生をどう変えるのか』、東信堂、東京。
- (2) 筒井 洋一、西森 寛、安田 圭佑、数井 浩子/
「ボランティア中心型授業における関わり方と学生の変容— 京都工芸繊維大学「リーダーシップ基礎2」を事例にして—」
『第26回 大学教育研究フォーラム』2020年3月18日